

菅原氏と年中行事

北山円正

一

菅原氏は、平安時代において文章道を担う家柄として活動し、清公以来代々文章博士や式部大輔などの文官を輩出してきた。学問を講授し、政事にかかわる種々の文章を草し、さらには朝廷の催す宴席に陪侍して詩を詠じるのを家業の柱としていた。清公・是善・道真の三代には、それぞれ『菅家集』・『菅相公集』・『菅家文章』『菅家後集』があり、文業の数々が収められている。清公と是善の詩文集は失われているが、道真のそれは今に伝えられている。この二集によれば、道真および菅原氏の公私にわたる文事の中味を知ることができる。道真はその作品数が多く、学者文人としての動向は細かな部分まで明かとなっている。とりわけ昨今注目を集めているのは漢詩であつて、中国文学受容や仮名文学への影響など多方面において研究の対象となっており、その成果は着実に蓄積されている。ただ道真の詩文は、たんに文学という限

られた分野でのみ語られるべきではなく、広く当時の文化を視野に入れて読む必要がある。その意味で、詩作と深い繋がりを持つ菅原氏主催の年中行事、寒食・八月十五夜・九月尽日の宴を取り上げて、その行事がどのように始まつて展開し、当時の貴族・文人社会に波及したのかを述べたい。それは、平安時代の文化において菅原氏の果たした役割を述べることにもなるであらう。

二

寒食は元来中国の行事であり、立冬から数えて百五日目とその前後一日を合わせた三日間火を一切用いなかつた（禁火）。つまり燈火を点さず冷食するのである。この三日間が過ぎた百七日目の清明には禁火を解く。唐の時代、寒食の頃には人々には休暇が与えられ、展墓・踏青（野遊）・鬪鷄・打毬（ボク）・鞦韆（ブランコ）・蹴鞠・宴会などを行つた¹⁾。また帰省することも多かつた。菅原道真とその岳父島田忠臣には寒食の詩が次のように見られ

る。

- 1、待来寒食路遙遙、自_二陽生_一二百五朝。天愍_二子推_一嫌_レ拳_レ火、柳烟桃焰雨中消（『菅家文章』巻一、「陪_二寒食宴_一、雨中即事、各分_二一字_一。得_レ朝」。貞観十_二八六六_一年の作）
- 2、「寒食日、花亭宴、同賦_二介山古意_一、各分_二一字_一。探_レ得_レ交_レ字」（同巻六。昌泰一_二八九九_一年の作）
- 3、寒食踏_レ青細草頭、歳来今日放_レ春遊。平明出_レ郭昏_レ応_レ去、小樹花前軟脚留（『田氏家集』巻之上、「寒食踏_レ青行。得_レ遊」（十年の作か）
- 4、「菅家寒食第三晨宴遇_レ雨。同賦_二煙字_一」（同巻之下。貞観十年の作か）
- 5、「菅家寒食、賦_二花発満_一皇州」（同巻之下）

いずれも寒食の宴において詠じられた作である。菅原氏が寒食の宴を催していたことは、4・5の「菅家寒食」によって明かであり、道真の作である1・2も「菅家寒食」での詩であろう。3はいかなる場で詠じたかを記していないが、「得_レ遊」とあって、探韻で「遊」の韻を得たことを示しており、詩会での作であると分かる。忠臣と菅原氏との関係——忠臣は是善の門人であり、道真の師であった——を顧みれば、これも「菅家寒食」である可能性が高い。詠作年時からして、1は是善、2は道真の主催した宴である。

- 6、子推子推愧若_レ靈、聴_二我君恩_一説_二丁寧_一。賢哲_レ応_レ知天命數、何_レ投_二山火怨_一朝廷（『擲金沙』下・絶句部・天時、菅相

公「寒食宴、同賦_二神靈不_レ聴_一拳_レ火_一」

この詩は、菅原氏の「相公」（参議）になった某人の作である。道真は参議ではあつたが、後年「相公」と呼ばれることなく、また極官は右大臣——薨後は正暦四（九九三）年五月に左大臣、同年閏十月に太政大臣を追贈されている——であるので、この人物には該当しない。菅原氏で「相公」と呼ばれているのは、是善と道真の曾孫輔正である。⁽²⁾ 兩人ともにこの「菅相公」である可能性はあるが、道真歿後は菅家が催す寒食の宴が諸資料に見られなくなるので、時代の下る輔正ではなく是善の方がふさわしいだろう。詠作年時は不明であるが、これも「菅家寒食」における詩と考えられる。

右の1～6には、「宴」や「菅家寒食」の語が見られるとともに、詩題を「同賦……」と記し、韻字を「各分_二一字_一得_レ朝」「同賦_二煙字_一」などと示している。これは是善や道真はもとより、島田忠臣をはじめとする詩人たちの参加を意味する。例のすべてが詩会での作であり、『白氏文集』の寒食詩のような独詠はない。菅家のこの宴では作文を伴ったのである。参加した詩人は、主催者を除けば島田忠臣以外は明かにできない。ただ、当時作文の行われた菅原氏の宴には門人の集まったことが、後述する八月十五夜と九月尽日の宴では確かめられるので、寒食も同様と考えてよい。この日は菅原氏の私塾である菅家廊下に門人が集い、詩を詠じていたのである。

宴の中味を述べておきたい。文人が集まって作文を行ったのは

明かであるが、それ以外については資料に乏しく、実態はあまり分らない。今は詩に述べるところによって推測するほかない。

7、寒食者悼_レ亡_レ之祭、重陽者避_レ惡_レ之術。故本_二義_一幽閑、寄_二

言_レ節候_一（『文章』巻七、「洞中小集序」貞觀九年、依_二雲林院親王命_レ所製_一）

この常親親王の『洞中小集』に寄せた道真の序は、寒食は「亡きひとを悼む祭」であると述べている。「祭」は、祭祀を中心とした儀式のようなものであろう。「悼亡」は、晋の介子推が失意のうちに綿上山で焼死したことを悼むという意⁽⁴⁾。この故事に因んで禁火冷食の習俗が生まれたのであった。1の「天愍_二子推_一嫌_レ拳_レ火、柳烟桃焰雨中消」は、禁火を詠じている。「悼亡之祭」では、燈を点さず、冷たい食へ物を口にしていたのであろうか。詩には、寒食の風習が次のように詠まれている。

2、今朝不到_二太原郊_一、禁_レ火思_レ人異_レ代交（禁火）

請看冷酒又寒肴、心_二是辰辰不_二暗抛_一。再拜終無_二他礼奠_一、落花自与_二紙錢_一交（禁火）

3、寒食踏_レ青細草頭、歲来今日放_二春遊_一（踏青）

4、雖_レ賀_二王春施_一惠沢、猶嫌_レ微雨似_二輕煙_一（禁火）
今日雨中榆柳樹、縱雖_二鑽過_一不_レ成_二煙_一（禁火）

5、晴景踏_レ青心_レ遍_レ地、芳時侵_レ黒欲_レ歸_二家_一（踏青）

このうちの踏青は、5の「寒食踏_レ青行」のように詩題となっており、詩情を生み出すための一つの契機としたのであろう。詩宴では踏青はできないから、これは題材にとどまらざるをえない。

2には「再拜終無_二他礼奠_一」とあって、介子推を慰霊する儀式以外はしないと云っている。したがって菅家の寒食宴では祭奠・冷食——禁火とは言え、儀礼や賦詩に燈火はなければならぬ——詠詩をする程度であつたらう。6の詩題「神靈不_レ聽_レ火」も介子推を祭る儀式の行われたことを想像させるに十分である。これは7の「寒食者悼_レ亡_レ之祭」とも符合している。

5の「明朝更滿春遊暇」によれば、中国と同様寒食には官人に休暇が与えられていたかのようであるが、実際はそうではあるまい。何となれば、つづく「却恨_二晨少_一麋術」は、寒食の三日目を休みにしている官庁が少ないことを恨めしく思うと言っており、一斉に寒食の期間に休暇が設けられているとは見られないからである。詩の「暇」は、休みが寒食に重なつただけではあるまいか。もとより日本には寒食の休暇はないのである。⁽⁵⁾元来平安時代の社会に、中国の寒食を受け入れる素地があつたのではない。『荆楚歲時記』などの年中行事の書や『芸文類聚』『初学記』などの類書、及び唐代の詩とりわけ『白氏文集』所収の寒食の詩に触発されて、文人らが寒食の宴を行ったのである。是善や道真ら中国文化についての特別な知識の持ち主が、寒食を受容しているのであるから、この分野に馴染みのない人々の間にはまず広げられない。

当時寒食はもっぱら文人たちの行事であり、おもに菅原氏とその門人が会して開いた宴であつたと想定してよいだろう。ただ、7の「洞中小集序」から窺えるように、他の文人らも介子推を祭

り、詩を詠じていたよつである。序には「言を節候に寄す」とあつて、季節の風物を詠む題材の一例として引かれているのであるから、ある程度知られた行事だったのであろう。それでも菅原氏らの場合は、他とは意味合いの異なる側面があつたと想像できる。

菅家廊下では、渡来の行事に興味を持ち、詩を詠じながらその始まりに思いを馳せ風情を味わうだけではなかつた。くわえて、門弟らが普段の研鑽の成果を發揮するべく詩作に励み、披露しあつたことであろう。この私塾は「大学寮の補助教育機関」の性格を有し、将来の文人官吏を養成していたのであるから、寒食の日の集いは、風趣を求める場として設けられただけではなかつたはずである。

日本における寒食の初見は、菅原是善・道真らを溯る。淳和天皇の在位時代天長四(八二七)年成立の勅撰漢詩文集『経国集』(巻十一)に、次のようにある。

8、正是寒食節、共憐鞦韆好……佳麗鞦韆爲「造作」、古来唯惜春光過「清明」……此節猶伝「禁火」、遂無「燈月爲「燈」嵯峨天皇、「雜言鞦韆篇」。天皇在位時代(大同四「八〇九」年)弘仁十四(八三三)年)の作)

9、寒食節、周旧制、禁火余風猶不「癢」(滋野貞主、「雜言奉和「鞦韆篇」)

弘仁年間には寒食はすでに詩の題材になつていた。「鞦韆」がその時の遊戯であることも、「禁火」の風習も、知られていたのである。住人が鞦韆に興じたり、禁火を行つたりしていたのである

うか。この君唱臣和の詩がどのような場で詠じられたのか不明であり、当時の寒食の実態は分からない。嵯峨天皇と滋野貞主が「鞦韆篇」を詠んだ頃は、菅原是善の父清公が活躍していた時である。

清公が右の唱和を知つて、自家に寒食の宴を持ち込んだ可能性は考えてもよいだろう——詠作が残らぬながら、清公もその場に加わつていたかもしれない。逆に中国の詩文に詳しい清公の方から嵯峨天皇の詩興を刺激して、詩会開催へと導くことがあつたと考えられようか。——かりにそうだとすると、菅家の寒食は弘仁期あたりから始まつたと推測できる。ただ弘仁期以降、忠臣・道真の時代まで寒食の詩は見出せない。行事実施の記録も伝わっていない。弘仁年間の二首が残るとは言え、そのみでは宮廷においても菅家でも寒食の行事があつたとはい断断できない。現存の資料からは、この行事の始発期の姿がおぼろげに見えて来るだけである。

下つて道真歿後に、寒食の宴が催された形跡は見出せない。詩には、

10、夜遊人欲「尋来把」、寒食家応「折得驚」(『和漢朗詠集』巻上・躑躅、源順。『和漢朗詠集私注』によれば、詩題は「山榴艶似「火」」)

11、功成未「報怨長去」、山下空对介子田(『擲金沙』下・絶句部・天時、藤原伊周「清明日」)

があるものの、どちらも行事の実施を認めうる決め手とはなりがたい。10の後句は、躑躅の花の赤さは、禁火をしている寒食の家

の人を驚かすほどだと言っているのであって、比喩として「寒食」を引いたまでである。11の詩題「清明日」は、三日間の寒食を終えた翌日であり、後句の「介子」は、7の「寒食者悼亡之祭」で触れた、寒食の起源説話に登場する介子推である——1の第三句と6の第一句の「子推」も同じ。2の詩題の「介山」は関連する語——。そうなる伊周（九七四——一〇一〇）の時代には寒食の行事が催されていたと考えてよさそうではある。しかし、詩を詠んだ状況がはっきりしないので、実際にどうであったかは分からない。題には詩宴での作とは記していない。その日に因んだ故事を取り上げたと考えるのが、今のところ妥当なのではあるまいか。白詩などは広く読まれていたのであるから、寒食や清明に関する知識を失うことはなかったはずである。にもかかわらず菅原氏にすら行事開催の動きは見えない。平安時代の中後期にこの行事は姿を消したのであるうか。たとえ命脈を保っていたとしても、限られた人たちによるささやかな営みでしかなく、注目を浴びることも殆どなかったのであろう。

もともと寒食は、日本では受け入れにくい行事であった。中国の行事が背後に持つ気候風土などが異なる以上、導入には困難が伴う。禁火・冷食などをなせ行うのが納得できないに違いない。このような状況の中、菅原氏は、詩宴を中心に据えて寒食を行事として定着させていた。それは、ひとえに『白氏文集』への関心に基づくのであろう。白詩には寒食の詩が多く収められており、唐代の他の詩人に比べるとその数は群を抜いている。白居易が重

視する行事である寒食⁽⁷⁾に惹かれて、菅家廊下での詩宴の格好の題材として採用したのであろう。

日本へは導入しにくいこの行事を、一部の文人だけが催したのであるから、他へはなかなか広がらない。いったん挫折すると、復活はむづかしい。寒食は、菅家廊下という結束力のある文人集団が推進して、存続したようである。道真の左遷によって集団の勢力が衰え、それにともなうて行事が衰亡に向かうのは当然だったと言える。

三

八月十五夜⁽⁸⁾の月を詩に詠むのは、盛唐杜甫の「八月十五夜月二首」に始まると言われている⁽⁹⁾。

満目飛⁽¹⁰⁾明鏡、帰心折⁽¹¹⁾大刀。 軒蓬行⁽¹²⁾地遠、攀桂仰⁽¹³⁾天高
(其一)

旅にあつて故郷に戻れぬ悲しみとともに、月の明るさを描いている。この詩は、つづく十六夜十七夜の月の詩と一続きである。しかもこの詩群の中では、「旧把金波爽、皆伝玉露秋」と十六夜の月をとつとび愛でており、十五夜の月を特別なものと見る意識はなかつたらしい。詩人が八月十五夜の月を賞翫し始めるのは、中期に入ってからであり、ことに劉禹錫や白居易にその詩が多い。

星辰讓⁽¹⁴⁾光彩、風露發⁽¹⁵⁾晶英。 能変⁽¹⁶⁾人間世、倏然是玉京(劉禹錫「八月十五日夜玩⁽¹⁷⁾月」)

人道中秋明月好、欲邀同賞意如何。華陽洞裏秋壇上、今夜清光此所多（『白氏文集』卷十三・0627）「華陽觀中、八月十五日夜、招友翫月」

月好共伝唯此夜、境間皆道是東都（同卷六十五・3182）「八月十五日夜、同諸客翫月」

日本では、八月十五夜の月を詠じる詩は、菅原是善・道真の時代に到るまであらわれない。中唐詩特に白詩摂取とともに、にわかには仲秋の明月への関心が高まってくるのである。是善の詩は残っていないが、道真の時代に作られた八月十五夜の詩および詩序は多数存している。それらによってその日の宴の様相を窺ってみる。

1、三千之徒、式宴于三五之日……満月光暉、咸陳中庭之玉帛。数盃快飲、一曲高吟（『文章』巻一、「八月十五夜、嚴閣尚書、授後漢書畢、各詠史、得黃憲」序。

貞観六（八六四）年の作。「嚴閣尚書」は是善）

右は、製作年時が明らかに八月十五夜の詩文のうち、最も古い例である。『後漢書』講書の竟宴における催しの一つとして、詠史が行われている。この日は明月賞翫が主眼ではないのだが、八月十五夜に竟宴を設定するところに、興趣を盛り上げようとする是善の配慮が感じられる。

2、「八月十五夜、月亭遇雨待月。探韻得无」（同巻一）
3、「戊子之歳、八月十五日夜、陪月台、各分一字。探得登」（同巻一。貞観十年の作）

この詩に見られる「月亭」「月台」は、「小廊新成、聊以題壁」（同巻二）の「北偏小戸蔵書閣、東向疎窓望月亭」や、『文粹』（巻八、紀長谷雄）の詩題「八月十五夜、陪管師匠望月亭」、同賦「桂生三五夕」の「望月亭」と同じと考えられる。明月を望むためにしつらえた建物であり、この夜の行事のために、かなり力を入れていたことが察せられる。

4、菅家故事世人知、翫月今為忌月期（『文章』巻四、「八月十五日夜、思旧有感」。寛平元（八八九）年の作）

讃岐守時代の作である。前句は、この日の明月を賞する宴は、自家がかつて催していた行事であり、世間の人にも知られていたと述懐している。独自にこの日の宴を開いていたことへの誇りが見て取れる。他に先駆けて、八月十五夜の月を賞翫する集いを始めていたのである。白居易の詩を十二分に摂取していた、菅原氏の面目躍如たるものがある。

菅原氏のこの日の宴には、門人たちが集まり、詩を詠んでいた。先に引いた紀長谷雄の詩題には「陪管師匠望月亭」とある。後に引く『田氏家集』のこの夜の宴における詩も、菅家での作と見てよいだろう。1の「三千之徒」は是善の門弟であり、参会者の多さを示す。この夜は、明月を愛でるのはもとより、寒食の宴がそつであつたように、作文によって弟子の学習の成果を試し、互いに競わせる好機としたものと思われる。披講の際には、主人である是善や道真による評価が下され、添削にまで及んだのではないだろうか。

是善・道真と同時代の詩人にも、八月十五夜における作がある。

5、夜明如_レ昼宴_三嘉賓_一、老兎寒蟬助_三主人_一（『田氏家集』巻之上、「八月十五夜宴_レ月」）

6、「八月十五夜惜_レ月」（同巻之上）

7、「八月十五夜宴_レ各言_レ志探_二一字得_レ亭」（同巻之下）

右の三首のうち、5・7は宴席での詠。製作年時は不明。5の後句の「主人」を、『田氏家集注』『田氏家集全釈』はともに作者のことと見ており、そうであれば「宴」の主催者は島田忠臣となる。

ただ、忠臣が八月十五夜の宴の主人となることは、師である是善の生前には考えにくい。この宴が4「菅家故事」として知れわたっていた状況で、忠臣が独自に宴を開くようなことはまずないからである。「主人」が忠臣だとすれば、詩の詠じられたのは、是善の薨じた元慶四年から何年か経ってからだろう。「主人」は是善または道真の可能性もあり、特定は困難かと思う。7についても、宴での作としか分からないが、菅原氏が催した宴での詩と見るべきだろうか。6は、詩題によれば独詠ということになる。いつ頃詠んだかは、手懸かりがなく明らかにできない。4の道真の詩と同じく、菅原氏がこの日の宴を廃してからの作であろうか。

道真と同時代の文人である三善清行の詩序に、

8、「八月十五夜、同賦_レ映_レ池秋月明」（『本朝文粹』巻八）

がある。清行は菅家廊下の一員ではないので、この詩会の場合は菅原氏とは関わりがないであろう。どういった人々がいつどこに集まったのか、一切不明である。儒家が派閥を形成して、対立抗争

が熾烈であつた当時、道真が4「菅家故事世人知」と誇示する八月十五夜の行事に、敵愾心を抱く清行が追隨して参加するとは考えがたい。この作文会は、八月十五夜の行事が公的に認知され、道真左遷に伴う菅原氏の没落以降に開かれた公算が大きい。

菅家一門が催していたこの行事は停廃に到る。元慶四年八月三十日に是善が薨じた（『三代実録』）からである。道真も、

9、仲秋_詠月之遊、避_二家忌_一以長廢（『文章』巻一、「同_二諸

才子_一、九月卅日、白菊叢_レ辺命_レ飲。同勅_二虚余魚_一、各加_二小序_一。
不_レ過_二五十字_一」序。元慶七年の作）

と述べ、4「_詠月今為_二忌月期_一」とも詠じている。八月は「家忌」の期間である。「忌」は門弟にとつても同様であろう。諸事に慎みを要する。したがって、先にあげた5・7の島田忠臣の詩が詠まれたのが、元慶五年以降ということはずまない。その後菅原氏は長く八月十五夜の宴を行うことはないのであるから、紀長谷雄の詩序、

10、「八月十五夜、陪_二菅師匠望月亭_一、同賦_二桂生_三三五夕_一」（『文章』巻八）

の製作時期が分かってくる。長谷雄は、「延喜以後詩序」（『文粹』巻八）に、「故菅丞相在_二儒官_一之日、復党_二同門_一」と述べており、菅家廊下への入門は、道真が文章博士（「儒官」）に任じられた元慶元年十月頃と考えられる。そうすると、長谷雄の10の菅家における詩序執筆は、この年からは善が歿するまでに限られる。是善歿後に八月十五夜の宴をすることはありえないからである。

是善薨去後道真是、4・9のように自家の八月十五夜の行事を追懐はしても、「家忌」のゆえをもって、催すことはたえてなかつた。ところが、この日の宴は、別の場に再び姿をあらわす。宇多天皇は寛平九（八九七）年七月に退位し、ついで醍醐天皇の治世が始まる。その直後に八月十五夜の詩宴が催されたのである。

11、秋珪一隻度_レ天存、下照_二千家不定_一門。聖主何憐_二三五夜_一、欲_二將望_レ月始臨_レ軒（『文章』卷六、「八月十五夜、同賦_二秋月如_レ珪、応_レ製_一」）

「応製」の語が示すように、天皇を中心とした宮廷での公式の宴が催されたのである。詩の内容は次のようなことである。「珪」のような月の光は、あらゆる家屋を照らして分け隔てはない。その公平さは、天子のあるべき姿に通じている。よって帝は月を愛するために、「始めて」檻干に向かわれるのである。従前の八月十五夜の詩には詠じられなかつた政治色を含んでいる。道真是、宮廷におけるこの日の宴の目的が、明月賞断のみにとどまらず、即位直後の天子が、政治における万人への平等な姿勢を表明する側面を持つ——醍醐天皇は事前に宴の意義をこのように述べていたのかもしれない——と解釈している。公宴としての性格が色濃く出ている。詩の第四句「始」に注目しておきたい。この語は、宮廷における八月十五夜の宴が、始めて行われたことを示しているのではないだろうか。たんに修辭としてだけではなく、この宴の歴史上の位置を明示するために用いたと見るべきであろう。菅原氏が自ら停廢して以降、この日の催しは行っていない。その意

味からも、新たな場での始発を記念して、『菅家文章』に書き留めたのではあるまいか。

ひるがえって考えてみれば、先考是善の薨去に伴って廢した行事が、復活した事態を眼前にして、道真是複雑な心境であつたろう。宮廷での宴への出席が、自ら「家忌」を破ることになるからである。反面、かつて4「菅家故事世人知」と自負した宴が、私的な催しから公宴へと格を上げたことは、あらためて自家の独自性や先見性に対して誇りを抱いたに違いない。詩題の自注には、「自_レ此以下十五首、大納言作」とあり、この年の六月十九日に権大納言に任じられている。異例の昇進を遂げるただ中であつて、踵を接するかのように今回の一門の誉れが重なり、得意の絶頂にもあつたと言つてよいだろう。

12、「八月十五夜、同賦_二天高秋月明_一、各分_二二字_一、応_レ製。探_得水字」（『文粹』卷八）

は、紀長谷雄の詩序。「応製」とあるので、これも公宴での作文と分かる。年時は、詩題および序の中味に手掛りがなく不明だが、11の道真の詩を、八月十五夜の公宴の始発における作と推測したので、それよりは下る頃と考えておく。

13、「八月十五夜、侍_二亭子院_一、同賦_二月影滿_レ秋池_一、応_二太上法皇製_一」（『文粹』卷八、菅原淳茂）

この詩序は、『日本紀略』によつて、延喜九（九〇九）年間八月の作と判明する。11の寛平九年以来、短期間でこの宴の公的性格が定着してきた様子が窺える。なお、序者の淳茂は道真の四男で

ある。序者に選ばれたのは、この行事と菅原氏との関係を考慮した上でのことであつたかもしれない。ここでの淳茂の起用は、菅家復活の兆しでもあつたらうか。

四

菅原氏独自の宴というべき八月十五夜の詩宴は、是善が歿して廃され、その後十年余宮廷行事となつて新たな方向へと展開していく。菅家廊下は、詩宴をひとつ失つたことになる。この空白を埋めるべく、道真は代替措置として、九月尽日の宴を創始した。

- 1、仲秋翫^{ユキ}月之遊、避^{ユキ}家忌^{ユキ}以長廢、九日吹^{ユキ}花之飲、就^{ユキ}公宴^{ユキ}而未^{ユキ}違。蓋白菊孤叢、金風半夜（『文章』卷一、「同^{ユキ}諸才子、九月卅日、白菊叢^{ユキ}辺命^{ユキ}飲^{ユキ}、同勸^{ユキ}虚余魚、各加^{ユキ}小序。不過^{ユキ}五十字」序。元慶七（八八三）年の作）
- 2、秋之^{ユキ}云^{ユキ}暮、唯菊独^{ユキ}残（『文粹』卷十一。紀長谷雄。右と同^{ユキ}題の詩序）

「家忌」のために八月中の宴は控えねばならない。また、九月は重陽節会のために慌たしい。そこで案出されたのが、九月尽日の宴であつた。⁽¹²⁾ 1の「諸才子」は、菅家廊下の門弟たちである。八月十五夜の詩宴は、明月を愛でる風雅の場であるのみならず、道真の門人を教育する機能をも有していたであろう。状況の変化に対応しようとして、九月尽日の詩宴が誕生したと考えられる。

そもそも中国における九月尽日の詩は少なく、平安時代に大いに広まった『白氏文集』には一首もない。⁽¹³⁾

砌^{ユキ}賞霜月尽、庭樹雲雪深（初唐宋之問「上陽宮侍^{ユキ}宴、心^{ユキ}制^{ユキ}得^{ユキ}林^{ユキ}字」。一本題上有九月晦日四字）

秋尽東行且未^{ユキ}迴、茅齋寄在^{ユキ}少城隈……不^{ユキ}辭萬里長為^{ユキ}客、懷抱何時得^{ユキ}好開（盛唐杜甫「秋尽」）

為^{ユキ}客無^{ユキ}時了、悲秋向^{ユキ}夕終……年年小搖落、不^{ユキ}与^{ユキ}故園^{ユキ}同上（同「大曆二年九月三十日」）

霜降三旬後、奠余一葉秋……潘安過^{ユキ}今夕、休^{ユキ}詠^{ユキ}賦中愁（中唐元稹「賦得^{ユキ}九月尽^{ユキ}秋^{ユキ}字」）

第一例以外は、「楚辭」の「九弁」や潘岳「秋興賦」（『文選』卷十三）以来の、秋の悲哀を詠じる伝統にのっとっている。第一例は、注に依らなければ、九月尽日の詩とは言えない。第四例の題には「賦得」とあるので、九月尽日の詩は文人の間に、ある程度広がっていたと認めてよい。これらは、九月尽日に詠じられた悲秋の詩として位置づけられるべきであろう。この類の詩趣は、平安時代において受容されており、少数ながら指摘できる。

- 3、潘岳夜来^{ユキ}應^{ユキ}穩睡、秋過無^{ユキ}復^{ユキ}面眉低（『田氏家集』卷之下、「九月晦日、各分^{ユキ}二字。得^{ユキ}送^{ユキ}。寛平元（八八九）年の作か）

4、嗟^{ユキ}乎潘郎^{ユキ}寓^{ユキ}直、雖^{ユキ}緩^{ユキ}愁惱之心、陶令閑居、難^{ユキ}堪^{ユキ}凋落^{ユキ}之思（『文粹』卷十一、紀長谷雄「九月尽日、惜^{ユキ}殘菊。心^{ユキ}製^{ユキ}詩序）

ともに、「九弁」「秋興賦」に詠じられた秋の哀しみを踏まえてい。ただ、九月尽日の詩におけるこの風情はあまり受け入れられ

ず、3・4以外は当時の例を見出してはいない。これに対して、他の九月尽日の詩は、行く秋を惜しむ思いを詠むのを専らとしている。九月尽日における惜秋の詩は、『白氏文集』に多い三月尽日で行く春を惜しむ感慨を、九月尽日に導入したと考えてよい。たとえば道真の詩の、

惜_レ秋秋不_レ駐、思_レ菊菊纒_レ殘（『文章』卷五、「暮秋賦」秋尽
詠_レ菊、応_レ令_レ）

非_レ齒_レ惜_レ花兼惜_レ老、吞_レ声莫_レ道_レ歲華_レ闌（同卷六、「九
月尽日、題_レ殘菊、応_レ太上天製」）

などが、

惆悵春_レ歸留_レ不_レ得、紫藤花_レ下漸黃昏（卷三・0631、「三月三

十日、題_レ慈恩寺」）

留_レ春春不_レ住、春_レ婦人寂寞（卷五十一・2240、「落花」）

不_レ獨送_レ春兼送_レ老、更_レ嘗_レ一酌更聽_レ看（卷五十五・2593、
「送_レ春」）

といった白居易の惜春の詩をもととしているのは明かである。平安時代の詩人たちが、『白氏文集』の三月尽日の詩に心惹かれ、共感して同趣の詩を詠じる中で、その風情を春に対する秋に及ぼすのは、自然な成り行きであつたらう。

このようにして九月尽日の詩が生まれ、この日の詩宴が、菅原氏によって創始されたのであつた。そして、わずかな時間をおいて、宴は新たな展開を見せる。まず、寛平二（八九〇）年閏九月二十九日に宇多天皇のもと、密宴が催される（『日本紀略』）。

5、 年有_二三秋_一、秋有_二九月_一。九月之有_二此閏_一、閏亦尽_二於今宵_一矣。夫得_レ而易_レ失者時也。感_レ而難_レ堪者情也。
宜哉_レ眷情惜_レ而又惜_レ……

天惜_二潤年_一閏在_レ秋、今宵偏感_レ急如_レ流、霜鞭近_レ警衣寒買、
漏箭頻_レ飛老暗投、菊為_二花芳_一衰又愛、人因_二道貴_一去猶留。
明朝縱_レ戴_二初冬日_一、豈勝_二蕭蕭夢裡遊_一（『文章』卷五、「閏九月
尽、燈下即事、応_レ製」）

序に「眷情」とあるように、九月尽日に関心を持ったのは宇多天皇であつた——道真からの働きかけがあつたかもしれない——。この年の春、道真は讃岐守の任を終えて都に戻つてゐる。そして、帰洛に合わせたかのように、新たな試みとして作文を伴う密宴が開かれたのである。詩序を作成するなど、宴を主導する任務を担つたのは、道真であつたらう。詩序には「近習者侍臣五六、外来者詩人兩三而已」とあつて規模は小さいが、菅原氏の詩宴が宮廷に取り入れられた記念すべき惟しと言える。周知のように、道真は宇多天皇に重く用いられられて政界の中樞を占め、異例の出世を遂げる。この密宴は、天皇と道真が強く結びつきを象徴する出来事といつてよい。その意味で、この詩序と詩が巻五の巻頭に置かれたのは、道真及び菅原氏の矜持を示しているかのようであり、注目してよい。

その後もこの詩宴は、場を変えて催されている。

6、 于_レ時九月廿七日、孰不_レ謂_二之_一尽秋_一。孤叢兩_二三莖_一、孰不_レ謂_二之_一殘菊_一。謹奉_二令旨_一、賦_二此_一雙闌_一……

惜_レ秋不_レ駐、思_レ菊菊纒_レ残。物与_レ時相去、誰厭_レ徹_レ夜看_レ。
〔『文章』卷五、『暮秋賦』秋尽翫_レ菊。応_レ令。并序。寛平六
年の作）

7、蘆簾砌下水辺欄、秋只一朝菊早寒……非_レ啻惜_レ花兼惜_レ老、
吞_レ声莫_レ道歳華闌（同卷六、「九月尽日、題_二残菊_一。応_二
太上皇製。同勅_二寒残看闌_一」。昌泰二（八九九）年の作）

このように、東宮敦仁親王（後の醍醐天皇）や宇多上皇のもとで
行われている。詩序や詩の内容から察すると、行く秋を惜しみ、
今なお咲きつづける菊花を賞翫するところに、詩宴の趣向があつ
たようである。当時の詩人たちは、すでに素地として三月尽日の
詩趣を身に付けていたので、九月尽日の詩への対応はたやすかつ
たことである。二例とも5のような密宴ではなく、もう少し規
模の大きい、公宴に準じる性格を帯びた詩宴だったかと思われる。
6は、父帝の影響を受けたのか、東宮が催している。宮廷で徐々
に認知されていったようである。ここでも道真は、詩宴の中心と
なって、運営などを取り仕切っていたのではないか。当代随一の
文人として、面目躍如だったであろう。7は、九月尽日の宴を密
宴として催した宇多天皇が、退位後も関心を持ち続けていたこと
を示している。道真は上皇との親昵を保っており、上皇の宴への興
味に応える働きをしたのであろう。

昌泰四（九〇一）年正月二十五日、天皇廢立を企てたとの罪科
によって、道真は大宰権帥に左遷された。その二年後の延喜三（九
〇三）年二月二十五日に、都へ戻る望みも空しく、配所において

五十九年の生涯を閉じた。道真が流罪となり、その息子たちも都
から追われ、四散して謫所へ下った。この首家凋落の情勢にあつ
ても、同家に始まる九月尽日の詩宴までが、一掃されるには到ら
なかつた。

8、秋之云暮、余輝易_レ斜、菊之孤芳、残色可_レ惜。嗟乎潘郎
寓直、雖_レ緩_二愁惱之心_一、陶令閑居、難_レ堪_二凋落之思_一……
人皆送_レ秋、所_二以賜_レ送_レ秋之宴_一、人皆惜_レ菊、所_二以降_レ
惜_レ菊之恩_一（『文粹』卷十一、紀長谷雄「九月尽日、惜_二
残菊_一。応_レ製」詩序）

この宴は、『日本紀略』延喜二年九月二十六日の条に、「於_二御殿_一、
有_二九月尽宴_一。以_二九月尽惜_レ残菊_一為_レ題。左大臣以下陪_レ座、奏_二
糸竹_一」と記されている。台閣の首班左大臣藤原時平以下が醍醐
天皇の下に陪侍して、賦詩奏楽があつたのであるから、前掲の5・
6・7の詩宴とは格式内容規模が異なる。文字通り宮廷社会に根
を下したと言つことができる。それは、菅原道真および首家の影
を感じさせない形で、この日の宴は定着していたということであ
らうが。

九月尽日の宴は、惜秋の風情が好まれただけで、宮廷に受け入
れられたのではない。5の詩序から窺えるように、この日の宴は
過ぎゆく秋への哀惜を主題としている。だが、菅家廊下で創始さ
れた宴の詩題には、1「白菊叢辺命_レ飲」とあつて、元来一年最
後の花である菊をいとおしむ気持ち背後にはあつた。秋の終わ
りである九月尽日と残りの菊との結びつきが、宴が親しまれる上

で大きな役割を果しているのである。6 「暮秋賦」秋尽詠「菊」・7・8 「九月尽日、題『残菊』と、いずれの詩も菊（残菊）を題材としており、それを通して九月尽日における思いを詠もうとする姿勢があらわれている。おそらく漠然と惜秋の感慨を詠むだけでなく、受け入れにくい面があったのであろう。菊という明瞭な哀惜の対象を絡めた結果、この日の宴は人々に馴染んだのである。

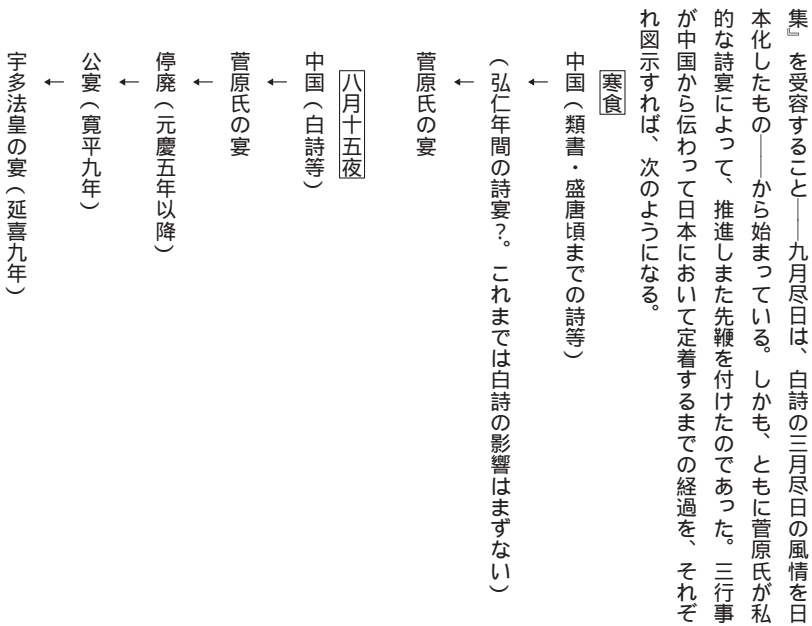
菅家廊下でこの宴が始まって公宴となるに到るまで、二十年足らずの歳月を経ている。創始者である道真は、延喜二年の公宴の日、謫所大宰府で苦難の生活を強いられていた中、次の詩を詠じている。

今日二年九月尽、此身五十八廻秋。思_二量何事_一中庭立、黄菊残花白髪頭（『菅家後集』、「九月尽」）

第三句「思_二量何事_一」は、自ら始めた九月尽日の宴が、都でどうなっているかに思いを馳せることも含まれているのではないだろうか。都の様子は知るべくもなかったろうが、この日の公宴に合わせたかのような詠である。宮廷での華やかな公宴と、大宰府における苦難の中の独詠を比べてみると、晴の場から隔絶された道真の没落が際だって来る。

五

以上述べてきたとおり、平安時代に行われた寒食・八月十五夜・九月尽日の年中行事は、まず中国の行事及び詩就中『白氏文集』を受容すること——九月尽日は、白詩の三月尽日の風情を日本化したもの——から始まっている。しかも、ともに菅原氏が私的な詩宴によって、推進しまた先鞭を付けたのであった。三行事が中国から伝わって日本において定着するまでの経過を、それぞれ図示すれば、次のようになる。



九月尽日

中国（白詩の「三月尽」）

←

日本での三月尽詩の普及

←

菅原氏の九月尽日の宴

←

宇多天皇の密宴（寛平二年）

←

東宮敦仁親王の宴（寛平六年）

宇多上皇の宴（昌泰二年）

←

公宴（延喜二年）

このうち、寒食は菅原氏を中心とした文人たちの間で行われた程度で、それ以外への波及はあまり認められない。まして公宴にまで格上げされるに到ることはない。一方八月十五夜と九月尽日の宴は、一氏族を中心とした催しから始まって、宮廷での宴へと進展するなど、その広がりには瞠目すべきものがある。この二行事は漢詩創作のみならず、後には和歌を詠じる場ともなるなど、当時の文学に新たな題材を提供する結果をも齎した。その意味で、菅原氏や菅家廊下の担った役割は、甚だ大きいと言わねばならない。

山中裕『平安朝の年中行事』（序論）は、平安時代の宮廷行事を、

A 唐行事の輸入のもの

B 日本民間行事が宮廷に採用され歳事となったもの

C A、B 折衷のもの

に分類している。これによれば、八月十五夜の宴はまずAでよいであろう。九月尽日の宴は白詩の三月尽に端を発するもの、いちおうAに属すると考えられる。ただ三月尽は、もともと年中行事だったのでなく、詩の題材である。それが日本に持ち込まれて、独自の变化を遂げた後に宮廷に取り入れられており、右の分類に収まらない側面がある。またこの二行事は、中唐詩人白居易の作品の影響下にあり、しかも平安時代の文人が新しい年中行事形成に大きくかかわったのである。一詩人の作品が、一国の宮廷行事に深く関与するということがあったのは、当時の文化の特質として、注目に値するであろう。そして、このように行事誕生の背景経過を跡づけうる例は稀有と言えるよう。

〈注〉

(1) 寒食については、平岡武夫「白居易と寒食・清明」(『白居易—生涯と歳時記』所収)、中村喬「寒食清明の風習と行事」(『中国歳時史の研究』所収)、同「三月寒食清明節」(『中国の年中行事』所収)参照。

(2) 是善については、『菅相公集十卷』(貞享版)『菅家後草』卷十三、「献三家集一状」と『菅相公』(『本朝文粹』卷九「暮春南亞相山庄尚齒会詩」序)、輔正については、『史部

大卿相公。』(『本朝麗藻』卷下、大江以言「三月尽日、陪
吉祥院聖廟、同賦「古廟春方暮、各分二字詩」序)と
「吏部相公。(同、高階積善「九月尽日、侍「北野廟、各
分二字詩」序)がある。

(3) この序については、蔵中スミ「常康親王と雲林院」(『歌
人素性の研究』所収)、山口博「王朝歌壇の研究 桓武仁
明光孝朝篇」第二章・第二節「雲林院の歌壇」、参照。

(4) たとえば、『芸文類聚』「初学記」の「寒食」の項は、
范曄後漢書曰、周举遷并州刺史。太原郡旧俗、
以二介子推焚レ骸、有二龍忌之禁。至三其月一咸言、神
靈不レ楽レ举レ火。举移二書於子推廟云、春中寒食一月、
老小不堪、今則三日而已。
を引いている。

(5) 丸山裕美子「假寧令と節日——律令官人の休暇——」(『日
本古代の医療制度』所収)参照。

(6) 久木幸男『日本古代学校の研究』二七一ページ。

(7) 平岡氏は、注1)論考で「白居易はこれについて多くの
作品を残している。もし彼に歳時記を編集させたら、最も
多くのページをこの日の行事のためにさいたであろう」
「これ」は寒食・清明)と述べている。

(8) この日の行事については、山中裕「平安朝の年中行事」
二二一〜二三八ページ、大曾根章介「八月十五夜」(『大曾
根章介 日本漢文学論集』第一巻、所収)、渡辺秀夫『平

安朝文学と漢文世界』一二九〜一三三ページ、中村喬「八
月十五日中秋節」(『続中国の年中行事』所収)参照。

(9) 吉川幸次郎「杜甫と月」(『吉川幸次郎全集』第十二巻、
所収)。

(10) 柿村重松『本朝文粹註釈』(下)五六・五七ページ、後
藤昭雄「紀長谷雄「延喜以後詩序」私注」(『平安朝文人志』
所収)。

(11) 月光があらゆる物を照らす公平さは、既に「礼記」(孔
子間居)に、「天無私覆、地無私載、日月無私照」
と述べており、『新撰万葉集』(巻上・秋歌)にも、「秋天
明月照無私、白露庭前似乱機」と見える。

(12) 道真は、寛平二年九月頃の作である「感「白菊花」、奉
呈「尚書平右丞」」(『文章』巻四)の第五句「感昔三千門
下客」に、「予為「博士」、毎「年季秋」大学諸生、賞「翫此
花」と注する。文章博士に任じられたのは元慶元年であ
るので、この頃から毎年九月には、白菊の花を愛でる集い
を持っていたことが分かる。これが元慶七年の九月尽日の
宴に繋がっていったと考えられる。

(13) 九月尽日の文学作品については、小島憲之「四季語を通
して——「尽日」の誕生——」(『国語国文』第四十六巻一
号)、太田郁子「和漢朗詠集」の「三月尽」「九月尽」(『言
語と文芸』第九十一号)参照。